

# 20年のあゆみ



絶えることなき  
その温もり  
その優しさを  
忘援したい

画／(故)坂元 正一 神澤医学研究振興財団設立発起人・元理事  
元社会福祉法人恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター所長・元東京大学名誉教授

公益財団法人 神澤医学研究振興財団  
KANZAWA MEDICAL RESEARCH FOUNDATION



理事長 **神澤 陸雄**  
キッセイ薬品工業株式会社  
代表取締役会長 最高経営責任者

## はじめに

皆様には日頃当財団の事業運営にご理解とご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。おかげ様で当財団は、平成29年6月をもちまして、設立20周年を迎えることができました。これもひとえに財団を支えてこられました役員、評議員の皆様方と、多大な労力を費やして頂いて参りました歴代選考委員の先生方、並びに関係各位の皆様方の温かいご支援ご協力の賜物と心より厚く御礼申し上げます。

当財団は、「周産期を中心とするリプロダクティブ・エイジ及び高・老年期の女性に発現する各種疾患に関する成因、予防、診断、治療等の、多角的な研究の奨励等を行うことにより、医療・医学の発展を図り、国民の健康と福祉の向上に寄与すること」を目的として、当時のキッセイ薬品工業株式会社代表取締役会長神澤邦雄氏からの私財の提供、及びキッセイ薬品工業株式会社からの創業50周年を記念しての資金提供により平成9年6月に設立されました。

以来、この20年間に、当該研究対象領域に属する基礎又は臨床研究を行う若手研究者に対し、延べ197件の研究助成と74件の海外留学助成を、更に当該研究対象領域において先見的、独創的研究により、顕著な功績をあげた研究者に対し、神澤医学賞として延べ18件の褒賞を実施して参りました。又、研究助成並びに褒賞を受けられた研究者によるそれぞれの研究成果発表の機会として、毎年講演会を開催し、議論を通じて研究の更なる発展を図るべく取り組んで参りました。これまでのこうした事業活動を通じ、ささやかではございますが、財団設立の趣旨である、女性の健康の保持・増進に寄与し、ひいては少子化高齢化に対し医療面から多少なりとも貢献することができてきたものと考えております。



KANZAWA

MEDICAL  
RESEARCH  
FOUNDATION

20<sup>th</sup>

平成22年7月には、公益財団法人に移行し、新しい法制度の下、より適正かつ公正な運営が行われるよう組織、制度の見直しを行い、この領域における全国の若手研究者の研究活動の更なる一助となるべく、日々努力を継続しております。

この20年間の事業を振り返りますと、全国各研究施設の多くの若い研究者から毎年応募申請を頂くにつけ、彼らの研究活動に対するひたむきな熱意に感銘を受けてきたところであり、又、財団設立以来、事業運営に対して、いつもご理解とご協力を頂いて参りました歴代役員、評議員、選考委員の各先生方には、改めて心より感謝申し上げます。

20周年に当たり、財団事業活動を継続して推進していくことが、公益財団の使命であり、ひいては社会に貢献でき得るものであることと認識を新たにしております。又、これからも将来に向けて、全国の助成を受けられる若い研究者の間から実りある研究成果が生み出されていくことを大いに期待したいと思います。

今後とも、引き続き事業の充実に努めて参りたいと存じますので、変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

理事長 神澤 陸雄

KANZAWA *20<sup>th</sup>*  
MEDICAL RESEARCH FOUNDATION

ご 寄 稿

---

# 神澤医学研究振興財団 20周年を祝して

設立発起人 理事 高久 史磨

公益社団法人地域医療振興協会会長  
元自治医科大学学長



---

神澤医学研究振興財団は平成8年9月25日に設立発起人会を開催し、私は5人の設立発起人の1人としてこの財団の設立に貢献したことになる。

設立発起人会では財団の設立趣意、寄附行為、財産、役員、設立代表者が決められた。設立代表者としては当時、キッセイ薬品工業株式会社代表取締役会長であられた神澤邦雄氏がなられた。もともとキッセイ薬品工業が企画し、出資した財団であるから、発起人全員がその決定に賛成したことは言うまでもない。

この財団は「周産期を中心とするリプロダクティブ・エイジ及び高・老年期の女性に発現する各種疾患」に関する研究を奨励するためにつくられた財団であるから、血液学を専門にしてきた私が何故発起人の1人に選ばれたのか、さらにその後20年にわたって理事を務めさせていただいているのかはわからないが、社会的に重要な財団であり、幸い健康にも恵まれているので喜んで財団の役員を務めさせていただいている。また、毎年理事会で

旧知の方々に久しぶりにお会いしてお話するのも楽しみの一つである。

今までの受賞者の方々は産科・婦人科または女性医学の研究者がほとんどで、選考委員も上記の研究領域に造詣の深い方々によって構成されている。従って、私の役目は理事会に出席し選考委員会の結果を承認(といっても受動的である)し、褒賞式に出席するだけであった。

私の神澤医学研究振興財団に対する唯一の貢献といえば、発起人会か第1回理事会、そのどちらかであったかは不明であるが、財団の医学賞の名前を何にするかということが話題になった時、私の記憶に間違いがなければ私が、「上原財団や武田財団など何れも創始者の名前をつけた賞を出しているので、この財団の賞も『神澤医学賞』にしてはどうですか」と申し上げ、出席の皆様にご同意され、神澤邦雄会長も嬉しそうな顔をされた事である。もし間違っていればご容赦願いたい。

神澤医学研究振興財団は、平成22年7月1日に公益財団法人となった。わが国における女性

の活動の振興が大きな社会的課題になっているわが国の現状を考えると、神澤医学研究振興財団の役割は今後、益々重要になる事は間違いない。

財団のさらなる発展を信じて本文の締めくくりとしたい。

---

## 当財団の軌跡と今後の課題

設立発起人 理事 小川 秋實

信州大学名誉教授  
元信州大学学長



キッセイ薬品工業の先代の神澤邦雄会長は、学術や文化の振興に関心が高く、会社が創業50周年を迎えたとき、記念事業の一環として、医学研究を助成する財団の設立に並々ならぬ意欲を示された。

設立発起人には、会社の会長と社長のほかに、東大名誉教授で母子愛育会総合母子保健センター所長の坂元正一先生、自治医科大学長の高久史磨先生、それに信州大学学長だった私が会社の地元ということで加わった。設立に中心的に尽力し、趣意書の草案を書いたのは坂元先生だった。ちなみに、私は東大在職中に、尿路に問題がある婦人科疾患の治療に坂元先生と一緒に手術することが多かった。坂元先生と再び親交を結ぶことができたのは、この財団のおかげである。

助成の対象領域が決まるまでに主務官庁との折衝に若干の紆余曲折があったが、1997年、女性医学研究に対する研究助成財団として設立が許可され、リプロダクティブ・エイジ（生殖可能期）および高・老年期の女性に発現する疾患に関する多角的な研究に助成（海外

留学助成、褒賞を含む）を行うことになった。

バブル崩壊以降、多くの民間財団は、金利の低下から基金の果実で事業を継続するのは困難な状況になったが、当財団はキッセイ薬品工業株式会社から毎年高額の寄付金が寄せられているため、20年間にわたり事業を滞りなく行うことができた。財団発足時から、財団運営に尽力された神澤邦雄前理事長と坂元正一先生は、すでにこの世を去られたが、財団が20周年を迎えたことを天国で喜んでおられることであろう。

近年、研究者は外部資金（競争的資金）を獲得しなければ研究が難しくなった。外部資金として科研費が最も大きいですが、旧帝大や一部の国立大に優先的に配分され、私立大や地方の国立大への配分は少ない。一方、民間財団の助成は、金額的には、科研費の四分の一程度に過ぎないし、しかも科研費の受領者が重複して配分を受けることが多い。しかし、一部には、科研費と異なる評価基準に基づいて、独自性のある課題に助成している。そのため採択を期待している研究者は多い。

研究助成をより充実するために、今後の課題としたいことがある。研究計画の審査では、分子生物学的手法を用いた基礎研究が採択されるが多かったが、今後は適正な統計手法を用いた臨床研究も重視して採択すべきであろう。また、外部資金の獲得が難しい研究者を優先してもよいのではないか。研究成果は、発表会での講演だけでなく、必ず学術誌に論文として発表してもらおう。その論文の引

用回数等の調査に基づいて成果を客観的に評価できれば、助成費の配分が適正であったかを判断できる。また、この評価結果を財団のホームページ等で公表すれば、助成の成果をより積極的に発信することになる。

今後もこの財団が意義ある研究助成を続け、国民の健康と福祉の向上に大いに寄与したいられるようになることを願っている。



## 神澤財団と共に歩んだ20年

理事・元選考委員長 大澤 仲昭

大阪医科大学名誉教授  
元藍野大学学長



この度神澤医学研究振興財団が設立20周年を迎え、大きく発展されて居りますことは本当に喜ばしいことと存じます。

思い起こせば財団設立の際、私にも参加の要請がありました。財団設立の目的は「周産期を中心とするリプロダクティブ・エイジ及び高・老年期の女性に発現する各種疾患に関する成因、予防、診断、治療等の多角的研究云々」ということでしたので、当初これは産科婦人科医療を中心とした研究助成が目的ではないかと考え、内科専門の私が何か役に立てるのかと疑問を持って居りました。尠が財団の目的を詳しく伺いますと、「女性の健康の保持・増進に寄与し、ひいては少子化高齢化に対し医療面から貢献する」と言うことで、私の役割にも納得出来、喜んで参加させていただきました。

少子高齢化は21世紀の我が国に於ける最も重要な問題の一つであり、現在国をあげてその対策が急がれて居りますが、20年前の財団発足当時を振り返って見ますと、勿論少子高齢化は問題とはなっていました、ただそれ程切迫した状態ではなかったように思います。そのような時期に早々と少子高齢化対策の重要性に着目し、且つ女性を中心に対策を考えると云う極めて明解で、具体的な研究領域を設定されたことは、その先駆性にあらためて敬意を表したいと思います。

このように財団の目的が具体的であること

は、私が選考委員会の委員長を務めました際に大きな支えになりました。私は医学と名がつく研究は、基礎研究であれ、臨床研究であれ真理の追究は当然として、最後には患者に還元されて始めて目的を達すると考えて居りましたので、申請された研究内容を審査するに当たっては、財団の目的をふまえ、その点を明確にするように努めました。困難なこともありました、今では楽しい経験をさせていただいたと思っております。最近応募数も驚く程増加し、研究の質も高くなって居りますことは素晴らしい限りですが、一方選考委員の先生方のご苦勞がしのばれます。

また、財団の主旨として、研究の助成が若手研究者の育成を中心としていることも特筆すべきことと思います。研究費の獲得が容易でない現在、特に若手研究者に夢を与えられる財団として、ますますの貢献が期待されます。

その為にも財団の経営が重要ですが、幸い神澤陸雄理事長を始めとするキッセイ薬品工業株式会社からの御支援のもと、財団が順調に運営されていることは、本当に有難いことと思っております。神澤医学研究振興財団が設立20周年を期して、更に大きく発展することを期待して居ります。

## 初代選考委員長の思い出

理事・元選考委員長 青野 敏博

徳島大学名誉教授  
元徳島大学学長



神澤医学研究振興財団が設立20周年を迎えられ、おめでとうございます。本財団はキッセイ薬品工業株式会社が多額の資金を提供され、平成9年に設立されました。設立の目的は「周産期を中心とするリプロダクティブ・エイジ及び高・老年期の女性に発現する各種疾患に関する成因、予防、診断、治療等多角的な研究を奨励すること」としています。当時は女性医学、生殖医学を対象とした研究助成はほとんどなく、産婦人科医としては大変有り難いものでした。

私は初代の選考委員長を平成9年より4年間勤め、平成13年からは理事をさせて頂いています。初代の選考委員会の構成は、委員長：青野敏博(徳大)、委員：岩垂正矩(キッセイ)、北 徹(京大)、塩田浩平(京大)、塚本泰司(札医大)、中野仁雄(九大)、野澤志朗(慶大)の各先生7名でした。その任務は研究助成(1件100万円)10名、海外留学助成(1件50万円)4名、神澤医学賞(1件200→300万円)1名を選考することでした。

研究助成には、当時年平均27.5件の応募があり、選考に際しては独創的、先進的な研究を行っている方々を選びました。手順は予め資料を配布して各委員が採点し、選考会議に持ち寄り、討議の上慎重に選び、理事会に報告し決定され、研究の成果は翌々年の研究成果講演会で発表して頂きました。

次に神澤医学賞については、財団の対象研

究領域において先見的、独創的、統合的な研究により顕著な功績をあげた研究者を選ぶことにしています。このために、日本産科婦人科学会、日本周産期・新生児医学会、日本生殖医学会などリプロダクションに関係する10学会の代表者、又は当財団の理事、評議員の推薦を要します。本賞には毎年3～6件の応募がありました。申請者の欧文論文業績なども参考に慎重に選考し、平成10年は倉智博久(阪大)、平成11年は佐川典正(京大)、平成12年は上妻志郎(東大)と産婦人科の3先生が選ばれました。ご三方はいずれも後に山形大、三重大、東大の教授に昇進されています。神澤医学賞の褒賞金額は初め200万円でしたが、理事会の席上で300万円に増額して頂くように選考委員長として神澤邦雄理事長に直訴したところ、快くお認め頂き翌年から300万円になった経緯があります。

これまで財団より研究奨励事業に3億円余の助成金が贈与されており、大学では研究費が年々削減され、本財団の研究助成金は貴重な財源になりつつあります。また神澤医学賞の栄誉が学会でも浸透して参りました。このような状況で平成28年の研究助成の応募数が62件にのぼり、選考委員会は嬉しい悲鳴をあげているとお聞きしています。

今後も益々本財団がご発展されることを祈念して筆を擱きます。

## 神澤医学研究振興財団への期待

理事 河邊 香月

東京通信病院名誉院長  
元東京大学医学部泌尿器科学教室教授



私は財団発足当初から、理事として参加させていただいている。

財団の目標である、成年期の女性の疾患研究というテーマに関しては、さしたる業績がないのに選ばれたのは、私の尊敬する、小川秋實元信州大学学長の推薦が大きかったと考えている。理事、評議員の名簿には、そうそうたるメンバーがそろい、私などは定年(東大では当時60歳)間近とはいえ「若輩」であることは明々白々である。財団の役員メンバーはのちに、数多くの叙勲者を輩出している。私の知りうる限りでは、高久先生の瑞宝大綬章をはじめ、小川先生、故坂元先生、故鴨下先生、故寺尾先生、青野先生、それに不肖小生も(銜気からではなく数合わせのための申告)瑞宝重光章を受けているし、また故櫻井先生は旭日重光章を受けられており、さらに何人かの方が続くことは確実であるのでこの種の財団での受章者の比率は大きく、当財団は人を得ていると思う。

一方、キッセイ薬品工業株式会社のことに触れると、同社はリザベン、ウテメリンでブレイクしたことはよく知られるが、排尿障害治療薬の分野での業績も大きい。かつて私の浜松医科大学当時の学長であられた、故中井先生が愛用(?)されておられた抗コリン薬、ミクトロールは極めて抗頻尿効果が高いものであった。その後キッセイ薬品では $\alpha 1A$ に特異性のあるブロッカー、ユリーフを開発し

た。この薬の開発途上では、いったん挫折しかけたものの、研究開発陣の努力により、ついに類似薬の世界的にもトップに躍り出たという快挙がある。不肖わたしも成年期に多い頻尿、尿失禁に関してはキッセイ薬品の提供する薬剤にいささか資するところもあった。さらにこの領域への研究新薬開発へは同社は研究陣が整っているので今後の発展が期待され、パイプラインにはいくつかの画期的な薬物があると思われる。これらは成年期の女性のwell-beingに力を発揮することは間違いない。

財団の使命としては、目標がしっかり掲げられており、利益を度外視して研究の補助に全力を尽くしておられることは心強い。さらに多くの研究が助成金によって進むと同時に、キッセイ薬品とのwin-winのサイクルを作り会社の発展をも期待したいところである。

## この20年で思い出す事

### 評議員 小柳 知彦

北海道大学名誉教授, 医療法人仁楡会会長  
元北海道大学医学部泌尿器科学講座教授



財団設立20周年真におめでとうございます。設立当初より財団評議員として運営に関わった者の一人として若干の思い出を綴らせてもらいます。

第一回の役員会が催された場所は東京の旧パレスホテルだったと記憶しています。学術を始めビジネス他斯界の各分野で活躍中の高名な諸先生と御一緒させていただける光栄もさる事ながら一番に思い出されるのはホテルが皇居の真ん前だった事もあいまって皇居一周ランニングの事です。目の前の横断歩道を渡るともうそこは皇居飯倉門、そこをスタートしての皇居一周ランニングは今のランニングブームが始まる前の事でコースもランナーで埋る事もなく、適度にアップダウンもあり信号待ちで滞る事もなく横目で皇居周辺の東京名所を眺めながらの5kmランはそれは楽しいもので役員会の翌朝は必ずと云って良い程走らせて貰いました。夏の北海道マラソン完走歴二度を有する自分にはランニングを終えてホテルのシャワーを浴びての帰札は気分を爽快にさせてくれ、次への栄気を与えてくれるもので懐かしい思い出です。

会議終了後の役員関係者を交えての懇親会情報交換会も楽しい思い出です。今はお亡くなりになりましたが東京大学名誉教授坂元正一先生のご挨拶もはっきりと憶えています。先生がスケッチされた産後間もない皇太子様を抱きかかえられる美智子皇后様の像が財団

講演抄録集のカバーを飾られておられるとの情報を知ったのもこの会にて他の役員の方から伺った事で、こうした情報を得られるなど役員の方の諸先生との会話も楽しい思い出としてホテルでの美味しい食事と共に脳裏に残っています。全国から一流の食材が集まる東京の一流ホテルでの情報交換会ですからどうしてもここでの食事のレベルがその他との比較のベンチマークとなってしまう、他の会食で神澤さんに勝るものがなかなか無いと感じる等スポイルされた自分を恨んでいます。

もう一つの会場ホテルオークラは神澤財団研究助成金ならびに神澤医学賞受賞発表の講演会場です。数年前滞在の際に案内された部屋からは米国大使館公邸の庭が良く見えました。中はどうなっているのか興味津々だった折、丁度自分が関係しているもう一つの財団、日米教育交流振興財団(通称フルブライト財団)の招きで公邸内へ案内される機会がありました。厳重な身分と身体チェックの後入れていただいた公邸内で前米国大使キャロライン・ケネディさんに直接お目にかかれて二、三言葉を交わしたのも楽しい思い出です。これも神澤財団に関わった余禄と有難く思い出させていただいています。

自分の専門分野の泌尿器科ではキッセイ薬品工業株式会社が開発されたユリーフ®がLUTS下部尿路症状改善に優れた効能を示す事から個人的にはオフラベルで女性のLUTS

にも用いている所ですが井川靖彦先生(現東京大学)がこの分野の基礎的研究で平成19年度神澤医学賞を受賞されたのも嬉しい思い出です。

以上とりとめもない事ばかりで恐縮ですが思い出すままにこの20年を振り返ってみました。

財団が今後も益々発展され医学医療の発展を通じて国民の健康と福祉の向上に貢献される事を願っています。20周年真におめでとうございました。

---

## 財団設立20周年によせて

### 評議員 中林 正雄

母子愛育会総合母子保健センター所長  
元東京女子医科大学母子総合医療センター教授



平成9(1997)年に本財団が設立された当時、設立発起人であられた故坂元正一先生は母子愛育会総合母子保健センター所長であり、私は坂元先生が東京大学を退官された後に開設された東京女子医科大学母子総合医療センターに勤務していました。先生のご推薦により財団設立時から評議員をつとめさせていただいておりますので、私にとって神澤財団といえば坂元先生が同時に思い起こされます。

故神澤邦雄キッセイ薬品工業株式会社社長と初めてお会いしたのは平成4(1992)年4月に開催された坂元先生退任祝賀会のときでした。秋篠宮紀子妃殿下のご臨席をいただき、私が司会進行を務めていましたが、事前に坂元先生から「キッセイの神澤会長には妃殿下とお話する機会を設けて下さい。」とのご下命がありました。この会はごく親しい人による内輪の会でしたので、坂元先生が神澤会長を良き友人として大切にされていたことがわかりました。平成12(2000)年に私が愛育病院に勤務するようになってからは、神澤財団の会議にはいつも坂元所長と一緒させていただきました。懐かしい思い出です。

20年前に設立された神澤財団の目的は、少子高齢化が急速に進行する現在の社会に最も必要とされる事業内容であり、発起人の諸先生の先見性に今更ながら感服しています。財団の研究助成による若手研究者の発表では研究への熱い情熱を感じ、また最新の研究成果

を知ることができました。神澤医学賞の発表では第一人者による研究の集大成を聴くことができ、とても有意義な会となっています。特に最近の発表会での研究レベルの向上は著しいものがあると感じています。理事・評議員の諸先生については、以前から存じ上げている方が多いのですが、皆様が広い見識を持った素晴らしいお人柄ですので、会議終了後の懇親会での会話がとても楽しみです。

最近では財団の評議員会でも神澤陸雄会長とお話することが多くなりました。私が財団のお役に立つことはほんのわずかしかなかったが、私が学会を開催する時には神澤会長から「お手伝いが必要であれば遠慮なくおっしゃって下さい。」ととても心強いお言葉をかけていただき、いつも感謝しております。神澤財団は財政基盤がともしっかりとしているので、運営に関しては安心して事務局におまかせでき、ありがたいことと思っています。

神澤財団の社会的意義・役割はますます大きくなっていくものと考えられます。今後の財団のご発展を心より祈念いたします。

## 第一回神澤医学賞を受賞して

第1回神澤医学賞受賞 倉智 博久

大阪母子医療センター総長  
元山形大学医学部産科婦人科学講座教授



神澤医学研究振興財団設立20周年、おめでとうございます。20年の歩みを拝見しますと、坂元正一先生、高久史磨先生など錚々たる先生方も加えて、神澤邦雄様、神澤陸雄様が発起人となられ立ち上げられたとあります。とくに、「女性の様々な疾病の成因究明、予防・診断・治療法の開発」などに、当時の神澤邦雄会長が私財を投じられたことに敬意を表したいと思います。また、設立趣意書を改めて拝見しますと、「近い将来深刻な少子・高齢社会を出現させることが予想される。」「女性の健康の保持・増進を図ることが基本的な対策として重要である。」などの20年前の記述とは思えない先見の明に満ちた格調高い文章に、今更ながら感心しました。

私にとって、平成10年度第1回神澤医学賞を受賞したことは、大きな誇りであり、その後の研究・臨床の大きな励みとなりました。また、困難な時の気持ちの支えでもありました。改めて御礼申し上げたいと思います。今も、私の部屋には平成11年3月1日付けの大きな賞状が懸かっています。財団スタート時の評議員であった松本圭史先生に、「賞を取ることにはなかなか難しいから、良かったな。」と言っていたことをよく覚えています。今は、多くの学会で若手・中堅の研究者を対象とする奨励賞などを設けていますが、当時はこれらの研究者を対象とする賞は少なく、われわれにとって何らかの賞を受賞すること

は難しかったように思います。

その後の神澤医学賞と研究助成の受賞者の研究内容の充実にはまさに目を見張るものがあります。毎年、受賞の対象となった研究課題を楽しみに拝見し、時々研究発表会にも参加させていただいていますが、新たな課題に最新の研究方法を駆使して取り組み素晴らしい成果を挙げておられることに感服しています。最近では、産婦人科以外の方々への助成も多くなりました。基礎医学を含め幅広い分野の研究者が受賞されることも好ましいことで、これが研究レベルの向上に寄与していると思います。

私自身は、受賞後平成12年に山形大学産科婦人科へ赴任しました。山形大学では閉経後女性の健康におけるエストロゲンの役割について研究を続けました。血管機能におけるエストロゲンの役割、エストロゲンの肥満抑制作用などについて研究を継続しましたが、ここでも、神澤医学賞をいただいた研究がベースとなりました。私にとって、本賞の受賞は今までの研究経歴の中でのハイライトであったと思います。

今後、ますます神澤医学研究振興財団が発展し、この中から、さらに素晴らしい研究成果が挙げるとともに多くの人材が育成されることを願っております。

# 神澤医学賞受賞後の 新規治療薬開発への発展

第10回神澤医学賞受賞 井川 靖彦

東京大学大学院医学系研究科  
コンチネンス医学講座特任教授



財団設立20周年を迎えられまして、心よりお祝い申し上げます。

私は、「下部尿路機能の神経調節機構の解明と下部尿路機能障害治療薬開発への応用」という研究テーマに対して、平成19年度(第10回)神澤医学賞を賜りました。改めまして、財団関係者各位に心より感謝申し上げます。

当時の研究テーマの中で、特に主題としました研究は、「 $\beta$ アドレナリン受容体( $\beta$ -AR)を介する膀胱弛緩機構の解明と蓄尿機能障害治療薬開発への応用」に関するものでした。膀胱の $\beta$ -ARに関する一連の研究成果は、選択的 $\beta$ 3-AR刺激薬が次世代の過活動膀胱治療薬として有望であることを支持するものでした。その後幸いにも、選択的 $\beta$ 3-AR刺激薬は、平成23年7月に新規過活動膀胱治療薬として世界に先駆けて我が国で認可され、今日では世界中で過活動膀胱に対する第一選択治療薬として使われるようになるまでに発展しました。このことは、私にとりまして、まさに、“Dream comes true”で、望外の幸せな進展でした。これも、ひとえに多くの共同研究者の皆様からのご支援と神から賜りものと感謝致しております。

受賞時は信州大学医学部泌尿器科学講座に籍を置いておりましたが、平成22年7月から東京大学に新設された寄付講座であるコンチネンス医学講座に異動して、引き続き、「下部尿路機能障害の病態生理学態研究と新規治

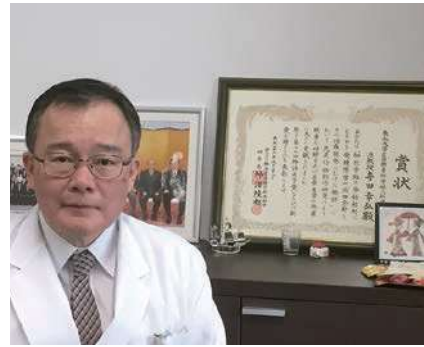
療法開発への応用」を主題として研究を続けております。キッセイ薬品工業株式会社様には、多大なるご支援を賜り、お陰様で2回の講座更新を経て、8年目を迎えております。この間、特に、「膀胱の知覚伝達メカニズムの解明と下部尿路機能障害の治療標的の探索」、「加齢に伴う膀胱機能障害の病態解析」、「間質性膀胱の病態解析と新規治療標的の探索」等を重点課題として取り組んで、74編の英文論文として報告してまいりました。これらの研究成果が、過活動膀胱や間質性膀胱炎といった膀胱の知覚伝達系の異常亢進を病態とする疾患群の次世代治療薬の開発に繋がることを切に願って、さらなる精進をしてまいりる覚悟です。今後とも、末永くご指導・ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。



# 神澤医学賞と私

## 第12回神澤医学賞受賞 寺田 幸弘

秋田大学大学院医学系研究科医学専攻機能展開医学系  
産婦人科学講座教授



教授室にて撮影

平成22年は私にとって大きな転機の年でありました。

1月には東北大学医学部奨学賞金賞を受賞し、5月には第12回目の受賞者として神澤医学賞をいただきました。受賞講演は参加いただいたキッセイ薬品工業株式会社の皆様にもご興味をもっていただけ、ほどなくして本社でも講演をさせていただきました。その時の、清々しい初夏の松本市の佇まいとキッセイ薬品の皆様のきめ細やかなお心遣いは今も快き記憶として残っております。

7月には現在の所属である秋田大学医学部産婦人科教授に選んでいただき、9月より主任教授としての新しい人生が始まりました。神澤医学賞をいただけたことは、教授選考にあたっての大きな要素であったと認識しております。改めて、神澤理事長、宮田常務理事をはじめとした財団および選考委員会の皆様方に感謝申し上げます。また、当時の日本受精着床学会理事長であった東北大学農学部名誉教授の佐藤英明先生にご推薦をいただきました。佐藤先生ありがとうございました。

本邦は現在世界一の生殖補助技術(ART)大国となっております。少子化対策などより沢山の公的な資金もARTの領域に入ってきており「生殖医療業界」は活況を呈しております。そのような現状を踏まえて、我々研究機関、医育機関に在籍するものとしては生殖補助技術の医学、科学としての客観的な情報

を更に発信してゆく責務があると認識しております。

地方大学の産婦人科教授は教育、診療、地域医療などの色々なタスクがあり、研究に費やせる時間がなかなか確保できません。しかし、教室の優駿たちが少しずつ生殖医学に関する研究も進めてくれており、最近ではScientific Reports、PLOS ONE、などにも論文が掲載されるようになってまいりました。

これからもこの栄えある賞の受賞者として精進してまいりますので、皆様よろしくお導きのほどお願いいたします。